

『キリストの生涯の観想』をめぐる二大托鉢修道会のイメージ戦略

荒木文果（慶應義塾大学）

本発表は、二大托鉢修道会による『キリストの生涯の観想 *Meditationes Vitae Christi*』のテキストとイメージを比較・検討し、14世紀から15世紀のイタリアを中心としたフランシスコ会とドミニコ会の内的ヴィジョンや宗教画像に対する立場の相違を示そうとするものである。

『キリストの生涯の観想』（以下、『観想』）は、14世紀初頭にトスカーナのフランシスコ会修道院で誕生したと考えられている書物である。イエス・キリストの生涯を、読者みずからが追体験するかのように、生き生きと情感を込めて描き出す本書は、中世末のヨーロッパじゅうで人気を博した。20世紀初頭に E. マールによって、当時の芸術家たちによる革新的な図像の発生源と位置づけられて以降、多くの美術史家が本書を図像表現の「教科書」のひとつとみなすようになった。2021年の J. キャノンの論考をはじめ、近年、この E. マールの見解は見直しが迫られているものの、『観想』がひとつの内的ヴィジョンの形成や視覚芸術に大きな影響を与えたことは疑いのない事実である。

一方、15世紀中葉にドミニコ会士フアン・デ・トルケマダ枢機卿は、ローマのサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ聖堂第一廻廊に描かれる予定の壁画を念頭において、34の祈禱文からなる『観想』を執筆した。このミネルヴァの廻廊のドミニコ会による『観想』連作は、約1世紀後に聖堂が改築された際、すべて消失した。しかし、20世紀前半の L. デ・グレゴリーの一連の論考が嚆矢となり、近年では G. デ・シモーネ（2002年）や A. E. ブルジョア（2009年）によって、史料や伝来する写本および挿絵入り印刷本に基づいて、失われた連作の物語配置や各画面の図像に関する研究が進められた。

これらの先行研究をふまえて、本発表ではまず、14世紀初頭にラテン語のテキストとして成立後すぐに、フランシスコ会の『観想』が、テキストの長短、言語、内容、挿絵の有無、そしてその図像にいたるまで、読者に応じて多様に変化しながらヨーロッパのすみずみに浸透していくさまを概観する。つづいて、フランシスコ会のテキストからつくり出される個々の内的ヴィジョンと同時代の絵画や彫刻が、化学反応を起こすかのように相互に作用し、さらに無数の視覚イメージが生成されたことを確認する。そのうえで、従来個別に考察されてきた両托鉢修道会による『観想』のテキストとイメージについて、13世紀初頭の設立当初から対立関係にあった両修道会の競合意識という観点で関連付け、それぞれの聖書解釈や宗教画像に対する姿勢の違いを指摘する。最後に、フランシスコ会出身の教皇シクストゥス4世の命により、1470年代にローマで制作された壁画もまた同様のコンテクストで考察するべき作例であることを新たに提示し、その壁画を15世紀ローマ美術史のなかに位置づけてみたい。